

北海道の馬

～「どさんこ」の成り立ちとその特徴

河合 正人 (かわい まさひと)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授
 耕地圏ステーション静内研究牧場 牧場長

博士(農学)、専門は家畜飼養学。「ミヤコザサを利用した北海道和種馬の林間放牧に関する研究」で学位取得(北海道大学)。1998年より帯広畜産大学に着任、馬および乳牛の放牧管理に関する栄養学的・行動学的研究を行ない、2015年より現職。馬および肉牛の放牧飼養管理に関する研究を行っており、馬に関しては北海道和種馬の栄養学的・行動学的特徴を明らかにし、放牧を活用した草地・森林管理技術の確立を目指している。



はじめに

わが国の馬の総飼養頭数は近年、1994年の122,410頭をピークに、2004年には10万頭を切り、2011年の74,610頭まで減少が続き、その後の飼養頭数はほぼ横ばいの状況ですが、2020年の時点で77,762頭と、約30年の間にピーク時の63.5%にまで減少しています(日本馬事協会馬関係資料)。「日本の馬力は“10万馬力の鉄腕アトム”たった一人に負けてしまうようになった」と、大学の講義や実習の中でよく笑い話にしていますが、主要な馬産地である北海道にとっては決して笑い事ではありません。

ちなみに日本で飼われている乳用牛の数は、2023年2月現在の畜産統計資料によると135万6千頭(うち北海道で84万3千頭)、肉用牛の数は268万7千頭(うち北海道で56万6千頭)となっています。乳用牛と肉用牛を合わせて404万3千頭の牛が日本で飼養されており、そのうち140万9千頭が北海道で飼われています。牛も馬も同じ大型草食家畜ですが、飼養頭数のケタが大きく違うことから、いかに馬が日本においてはマイナーな家畜であるか、よく分かる数値だと思います。

北海道の馬産

日本で馬といえば、サラブレッドを思い浮かべる人が多いことでしょう。実際、馬総飼養頭数77,762頭の

うち半数以上の45,433頭、58.4%が「^{けいしゅば}軽種馬」と呼ばれる競走用のサラブレッドです(図1)。年間7,500頭余りが生産されており、そのうち約98%が北海道生まれです。とくに日高地方(79.6%)と胆振地方(18.0%)がサラブレッド生産の中心だということは、道内のみならず全国的にもよく知られていると思います。

日本における馬総飼養頭数は、世界の馬総飼養頭数約5,900万頭のうちほんの0.13%にすぎません。アメリカの1,000万頭や、500万頭以上飼養しているメキシコやブラジルに比べると極々わずかな頭数です。一方、ことサラブレッドだけに注目すると、年間生産頭数はアメリカ、オーストラリア、アイルランドに次いで世界第4位を誇ります。このことは、我が国の馬産がサラブレッドに偏った、世界的にも特殊な馬種構成であることを表しています。

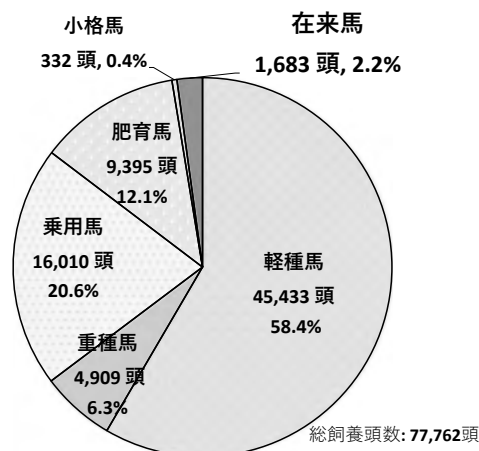


図1 日本の馬飼養頭数(馬関係資料2022より作図)

サラブレッド以外の馬をみると、割合の多い順に乗用馬が20.6%、肥育馬が12.1%、重種馬が6.3%、在来馬が2.2%、そして小格馬が0.4%と続きます（図1）。乗用馬は文字通り乗用に使う馬で、その77.7%が北海道で生産されています。肥育馬は馬肉生産に用いる馬で、馬肉を食べる食文化をほとんど持たない北海道では、その生産量は全国の1%未満です。小格馬はいわゆるポニーのことで、ほぼ100%が北海道生まれです。また、重種馬（数年前までは農用馬という用語でした）は、十勝・帯広ばんえい競馬で使われる**ばんぼ**のような大型の馬で、約85%が北海道で生産されています。こうしてみると、品種でも用途でもなく少々あやふやな分け方の印象ではありますが、日本にいる馬のうちわずか2%にしかすぎない在来馬が、今回の特集の主役です。

北海道の馬「どさんこ」

わが国で飼養されている在来馬は、北海道和種、木曾馬、野間馬、対州馬、御崎馬、トカラ馬、宮古馬、与那国馬の8馬種で、現在の総飼養頭数は1,654頭です（表1）。約3,200頭であった30年前に比べ、半数近くにまで減ってしまいました。北海道和種は1,087頭と、在来馬全体の約65%を占めていますが、30年前の2,600頭余りから大きく減少しています。北海道和種以外の在来馬は45から百数十頭と、それぞれの保存会の活動によりなんとか維持している現状です。

北海道生まれの人のことを「道産子」と呼ぶことがあります。北海道和種のアシカとしても、この「どさんこ」が使われています。ばんえい競馬でみる大型の

表1 日本在来馬の飼養頭数の推移（日本馬事協会HP）

馬種	年度	1992	2002	2012	2022
北海道和種（北海道）		2,665	1,790	1,345	1,087
木曾馬（長野県）		98	136	157	133
野間馬（愛媛県）		36	76	60	48
対州馬（長崎県）		92	28	28	45
御崎馬（宮崎県）		86	120	87	98
トカラ馬（鹿児島県）		114	126	114	85
宮古馬（沖縄県）		21	19	35	48
与那国馬（沖縄県）		91	105	130	110
合計		3,203	2,400	1,956	1,654

鞍馬のことをどさんこと呼ぶ人が北海道出身の道産子の中にもいますが、これはヨーロッパ原産の重種馬もしくはその混血馬で、いわゆるどさんこではありません。

「どさんこ」の語源は、もとは「土産」から来ていると言われています。戦中戦後、欧米から入ってきた馬のことをその生産国名、たとえば「アメリカ」や「イギリス」と呼び、東北地方からの馬を「南部」などと呼んでいました。それらと区別するため、その土地で生まれた馬という意味で「土産」と呼び、愛称としての「こ」がついたのだとされています。今でも、とくに道南地方の古い馬飼いたちは、自分たちが育てた馬たちを、愛情を込めて「どさん」と呼んでいます。

どさんこの成り立ち

もともと北海道には馬がいなかったという説が有力で、北海道開拓の際に東北地方から渡道した人たちが伴ってきた南部馬の子孫と考えられています。百有余年前、蝦夷地に渡った和人たちは南部地方の馬を連れて行き、ニシン漁や毛皮の運搬、乗用などの使役に使い、冬になると馬を置き去りにして本州に帰りました。翌春には新たな馬を伴って蝦夷地に渡りますが、厳寒の冬を生き抜いた馬たちも再び捕獲して使役に使い、冬にはまた置き去りにして帰るといったことが繰り返されました。

故八戸芳夫北大名誉教授（北海道和種馬保存協会第4代会長）はその著書の中でよく「蝦夷国風物誌（1788）」の一節を引用し、「夏の間は青草があるので、飢えることなく荒野をほつつき歩いているが、冬になって雪が積もると、雪の上に出ている枯れススキなどを食べている。さらに厳寒期には、枯れススキさえすべて雪の下になってしまうので、仕方なく海辺に出て、波に打ち寄せられた海草を食べていた…」と記載しています。こうした北海道の厳しい環境のなかで自然淘汰を受け、生き延びた個体だけが繁殖を重ねた結果、寒さに強く、粗食に耐え、持久力が強いとされるどさんこの資質が培われていったとされています。

北海道大学静内研究牧場では、道内の林床に優占するササ類を飼料として利用した、伝統的な林間放牧を含むどさんこの周年屋外飼育を行っています（図2）。どさんこの栄養特性や行動特性を明らかにする研究を実施しながら、どさんこ放牧の森林管理への活用を模索しており、詳細については次回の特集で書かせていただきます。



図2 ミヤコザサを利用したどさんこの冬季林間放牧

どさんこの体格

どさんこの体高は、世界家畜品種事典（2006）では123～135cm、また馬の品種事典（1997）では130～132cmと記載されています。また、公益社団法人日本馬事協会登録規程では、雄は127～130cm、雌は123～130cmを標準としています。図3に示した写真で軽種馬と比べると、体高、体重ともにひと回り小さく、またずんぐりむっくりした体型をしています。

1889年、イギリスの王立農業協会は、体高が148cm未満の馬を「ポニー」と称するよう提唱し、イギリスの多くの在来馬においてポニーという品種呼称が定着しています。この定義を用いれば、どさんこもポニーとして分類されることから、世界家畜品種事典（2006）では英名を“Hokkaido Pony”と記載されています。

しかし、近年アメリカで改良のさかんなアメリカン・ミニチュア・ホースは、体高が85cm以下と規定されているにもかかわらず、その体格が、いわゆるこれま

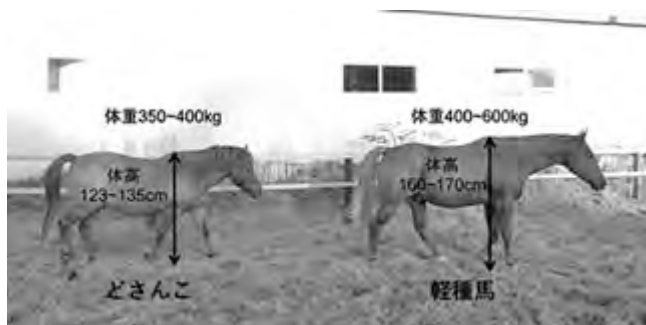


図3 どさんこと軽種馬の体格の比較

でのポニーとは大きくかけ離れているせいか、「ポニー」ではなく「ホース」の品種名がつけられています。体高が123～132cmと、どさんこほぼ同じ体格のアイスランディック・ホースも「ホース」であり、私どもはどさんこを“Hokkaido native horse”「北海道和種馬」と表記するのが一般的と考えています。

どさんこの毛色

どさんこの毛色はバラエティに富んでいて、遺伝子の多様性を表すひとつの指標といえます。サラブレッドの毛色は栗毛、枳栗毛、鹿毛、黒鹿毛、青鹿毛、青毛、芦毛、白毛の8色ですが、どさんこではこのうち白毛を除く7色に、河原毛、月毛、佐目毛、それぞれの原毛色の粕毛（栗粕毛、枳栗粕毛、鹿粕毛、黒鹿粕毛、青鹿粕毛、青粕毛）を加えた計16色あります。

河原毛（図4）はクリーム色からやや黄色味があったものまであり、四肢の先端や鼻先、長毛（たてがみと尾）が黒く、また背線が黒い「鰻線」があるものもあります。月毛もクリーム色から黄白色、真っ白まで変異が大きいです。全身白色であり、長毛も白色です。佐目毛（図5）はきれいな象牙色で、皮膚はピンク色、目が青い特徴があり、この目を魚目と記載することか



図4 河原毛のどさんこ



図5 佐目毛のどさんこ

